令和六年度　全日本中学生水の作文コンクール愛媛大会　最優秀賞

「ここから始まる努力の歴史」

新居浜市立中萩中学校　三年　片上（かたかみ）　沙羅（さら）

テレビにうつるアナウンサーは、今日も淡々とニュースを報じていた。しかしその内容は私にとって衝撃で、またとても興味深いものだった。ニュースは、県内の店で泥水が販売され、注目が集まっている、という内容だった。ペットボトルに入った水は、茶色く濁り底には砂のようなものが沈殿しているようにも見え、とても売り物とは思えない。そんな商品が店内に並ぶ様子や、水を真剣に見つめる客の表情が放送されていた。私はこの報道を見て、あの泥水がいったい何を伝えようとしているのか気になり、調べてみることにした。

ペットボトルに入った泥水の正体、それは世界で実際に利用されている水だ。アフリカのサハラより南の地域には、商品になっていたような泥水を、飲み水などとして利用している人が大勢いるそうだ。その影響で、五歳までに亡くなる子供は、毎年約二百万人。しかし、いくら汚染されていたとしても、現地の人にとっては、生きるために必要な水。水を手に入れるため、何時間もかけて汲みに行かなければならず、学校に通えない子供もいるようだ。

このような現実を多くの人に知ってもらおうと、あるＮＧＯ団体が立ち上がった。そうして考案された企画が、アフリカの水をペットボトルに入れて世界で販売するというものだったのだ。

詳しく調べていると、これに似た活動を見つけた。こちらは同じように汚水をペットボトルに入れ、自動販売機で購入できるようにした。アメリカ・ニューヨークの中心部に設置されているそうだ。

私は、世界の水について知識を増やし、考えを深めていく中で、二つのことに気づいた。

一つは、自分が水の問題を他人事のように捉えていたことだ。学校

の授業でＳＤＧｓについて学んだ時、私は「他の国の様子がよく分かった」と感想を書いた。しかし水の問題に国境など関係ないのだ。地球規模の問題をまるで自分は無関係であるかのように考えていた自分が、急に恥ずかしく思えてきた。

もう一つは、他人事だと考えている人は多くいるのではということだ。地球環境や水についての話題を取り上げる時、対策として節水や洗剤の使い方などが紹介される。「水の出しっぱなしをやめましょう」や「洗剤は必要な分だけ使いましょう」という言葉。一度はどこかで聞いた経験があるだろう。ではこれを、どれほどの人が実践しているだろう。たとえば手を洗う時、石けんをつけすぎていないだろうか。また、石けんで洗っている間、水を止めているだろうか。こう考えると、対策を生活に取り入れている人は、まだまだ少ないように感じる。

水の問題に関して、対策は必要だができることに限りがあるのもまた事実だ。先進国の日本ができることは、水をろ過する方法を教えるなど技術を教えることと、日本が水質を下げない努力をすることだ。技術の支援は、企業の協力が必要となるが、水質を下げない努力は、誰にだってできることだ。この時、他人事のように考える人は、

「一人の力ではどうにもならない。それに、日本国民全員が取り組んでも、大して変わらない。だから別にいいじゃないか。」

と言うだろう。確かに一人一人の力は小さい。国を上げて、一年本気で対策しても、大した効果はないかもしれない。でもそんなこと、あたり前だ。水の問題は何百年も何千年もの時間をかけ、少しずつ深刻化してきた問題だから。

あの泥水は私たちへの警告だ。このまま水の問題を放っておけば、悪くなる一方だ。確かに一人の力は小さい。けれど、積み上げていこう。そして創っていこう。次世代に恥じない努力の歴史を。